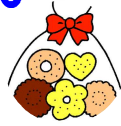


# ふしみサラダボール子育て情報

「正しい言葉遣いとは」

令和2年9月9日号

板橋富士見幼稚園



## 言葉を創る仲間

幼児は、言葉をどのように学ぶのでしょうか。大人の言葉の遣いには、高度な規則性があり、小学校6年生頃には、この高度な規則性を理解し、自分の思いを相手に的確に伝えられるようになります。しかし幼児は、周囲の大人達や兄弟などによって、言葉を学び始めます。

学び始める初段階は、「オウム返し」と言われる、模倣から始まります。そして、大人言葉の学びが中心に、兄弟や周囲の異年齢から、大人言葉が次第に子ども同士の言葉によって薄められていきます。こうして薄められた言葉の遣いは、子ども同士の会話の感覚を絆に替えていきます。

「なんとなく話が通じる」「なんとなく一緒にいて楽しい」「なんとなく懂れる」などの感覚が対話を弾ませ、遊びを繋ぎ、深め合うことができるようになります。

こうした言葉の育みの中で、時折、幼児でありながら敬語で話したり、「です・ます」で話したりする子どもと出会うことがあります。大人の中だけで育ってきたり、あえてそうしていたりするご家庭もあります。



子どもが遊びを十分に楽しむことのできる対話は、やはり子ども同士の言葉の響き合いの中で創られていきます。そのため、うちの子にはきれいな言葉で話せるように教えてきたのに、幼稚園に行ったら、悪い言葉や、汚い言葉をいうようになってしまったの、と嘆かれる保護者がいらっしゃいます。

でも、幼児は確実に、言葉の広がりを読んでいくのです。

相手との会話の中で意思疎通ができなくなった時、こうした汚い言葉や強い口調の言葉を手段として使うことがあります。この手段は、決して望ましいことではありません。しかし、正しいきれいな言葉をしっかり身に着けるためには、時にはこの汚い、強い口調の言葉を学ぶ必要もあるのです。

それば、正しいこと、悪いことを規準に価値づけ判断する機会となるからです。どのような言葉遣いが正しいのか、相手はどう感じるのかなど様々な事を学び、使い分けて生活できる能力が大切なのです。是非、色々な言葉遣いに触れられる、体験や経験を介して学べるよう、ご家庭でも心がけてみてください。